

# エンゲストロームによる「活動システム」モデルの音楽科教育研究への援用に関する考察 —スコーピングレビューを用いて— (要旨)

芸術系教育サブプログラム(音楽)

橋本 廉士

【指導教員】 森 薫 竹澤 栄祐 小野 和彦

【キーワード】 ユーリア・エンゲストローム 活動システム 矛盾 スコーピングレビュー 音楽科

## 1. 背景と目的

学習者個人だけではなく、学習の生起する社会・文化・歴史的状况にも着目し、学習者を取り巻く状況や周囲との相互作用から学習が生起するという学習論の思潮において、とりわけ重要な研究者のひとり、フィンランドの教育学者、ユーリア・エンゲストローム (Yrjö Engeström) である。

本研究では、エンゲストロームの理論を音楽科における学習の実践に対して用いる方法に関する基礎的検討を行うこととした。

本研究の目的は、エンゲストロームの「活動システム」(エンゲストローム, 1999/1987, 邦訳 p. 5) モデルの音楽科教育研究への適合性を明らかにすることである。その方法として本研究では、次の2段階を採った。

第1段階として、エンゲストロームによる「活動システム」モデル理論の文献研究を行。第2段階として、先行研究において、分析ツールとしての「活動システム」モデルがどのように用いられているのかを検討する。

## 2. エンゲストロームの理論

エンゲストローム (1999) は、ヴィゴツキーによる「媒介された行為の構造」(Vygotsky, 1978, p. 40) を基にして複合的な三角形のモデルを「人間の活動の構造」として図示する(図1)。この図が「集団的活動システムモデル」呼ばれるモデルである。そして、人間活動のダイナミクスと発展の源泉として「内的矛盾」を見出す。

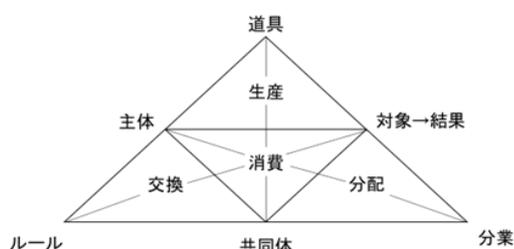


図1 人間の活動の構造

(エンゲストローム, 1999/1987, 邦訳 p. 79) より再構成

この図の各頂点について、音楽学習の実践の分析を例とすると、以下ようになる。

- ・【主体】：生徒たち一人ひとり。

- ・【対象】：音楽表現をはじめとする様々な表現。
- ・【共同体】：【主体】が属する集団。
- ・【道具】：楽器、楽譜、技能、知識。
- ・【ルール】：学校における明示的な【ルール】や暗黙の【ルール】。
- ・【分業】：合唱でのパート割や、生徒たち一人ひとりの取り組みの様子。

以上が、音楽学習の実践における活動システムモデルの各頂点である。

## 3. 調査

「活動システム」モデルの音楽科教育研究への適合性を明らかにするために、先行研究におけるモデルの用法について、スコーピングレビューによる調査を行った。

調査の結果、モデルの各頂点に何をどのように位置づけるかについてバリエーションが見られた(【主体】を生徒とするか教師とするか、【対象】を教材とするか学習内容とするかとするか、等)。このモデルの頂点の位置づけの多様さがモデルの使用上の柔軟性でもあり、一方では教育実践研究におけるツールとしての有用性につながっていると考えられる。

また、「矛盾」については、モデルの頂点のどの箇所に矛盾を見出すか、どのレベルの矛盾を取り扱うかに違いが見られた。矛盾の取り扱い方には、①頂点内部の矛盾のみ、②頂点同士の矛盾、③モデル外の要素との矛盾、以上の3種類が見られた。

調査を通じて、「活動システム」モデルが、音楽科における様々な活動を、【共同体】、【分業】、【ルール】—音楽科授業においてはフォーマルなそれらもインフォーマルなそれらも随時生起している—を含めて多角的に分析・解釈するツールとして極めて有用であることが示された。

今後の課題は、実際に分析ツールとして用いて、音楽学習の実践に対して「活動システム」モデルを用いた分析をすることである。

## 主要引用・参考文献

エンゲストローム, Y. (1999) 『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』山住勝広ら訳, 新曜社。